

「閏」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

鯨死す千尋の海を恋ひながら 橋本 恭子

今年の一月に大阪湾の淀川河口近くで見つかったマッコウジラの死を悼む。河口付近は水深も浅く、気の毒なことになった。マッコウジラの寿命は70〜80歳で、このクジラは調べた結果46歳だったというから寿命でないことは確か。河口に入った原因は結局解らなかつた。おもりを付けて沈められた鯨へ、せめてもの「千尋の海を恋ひながら」の措辞。悲しみの極みである。

ながながと貨車に葱積む深谷駅 長谷川菊男

埼玉県の深谷葱は千住葱、矢切葱、下仁田葱などと同じく根深で、柔らかく甘い。水原秋櫻子の句にも「深谷葱着きぬ鍋物何々ぞ」があり冬の鍋物には欠かせない。その葱を深谷駅から積むのだろう、この句の「貨車に葱積む」はその光景を詠んでいる。「ながながと」は、長い時間を掛けて葱を積んでいるという意味と、長く連結した貨車に葱を積んでいるという意味とを併せ持たせた言葉。葱の出荷で賑わう深谷駅が見えるようだ。「葱鮪」が食べたくなった。

着てゐますはに見立てしカーディガン 浜田 優子

カーディガンは前開きのセーター。このカーディガンを作者はかつてご母堂に買って差し上げた。それを現在はお自身が「着てゐます」。母から娘へ引き継がれ、今も現役で寒さから身を守ってくれている。「着てゐます」はその亡母に向かつての言葉。お蔭様で元氣ですよと。

スクラムを飛び出しラガー華となる 原田ミチ子

ラグビーは、サッカーと同様に冬の季語。ラグビー・フットボールが正式名称で「ラガー」は元来ラグビー競技の愛称である。現在ではラグビー競技者の意味に誤用されているが、それは言わぬ。この句ではその競技者が飛び出して「華となる」と詠む。体格も良く、抜け出てトライを決める姿は確かに格好いい。「華となる」は言い得ている。

啓蟄や蛇にも虫にもなる粘土 春田 千歳

粘土細工で蛇の形にしたり、虫を作ったり。粘土は想像力次第で何の形にでもすることができ。子どもたちが粘土を捏ねて新しい生命が生まれる。掲出句は「啓蟄」を季語に置いたことで、蛇や地虫が本当にあたかも穴から出てきたかのように読者を錯覚させる。俳句は季語次第とよく言われるが、この句は「啓蟄」で極った。

寒中の寒としてある鉄パイプ 平野 豊雄

寒々しい一句。鉄パイプは乱闘とか爆弾とかをイメージさせる物騒なものと一般的には思われ、この句もそこを踏まえ巧く作られている。殊に「寒中の寒」。この措辞が究極の寒さをよく伝える。鉄パイプのもつ怖さ、それを手にする人間の恐ろしさを存分に表現し得た。

これはさうな愛のかたちに冬の薔薇 福井 芳野

形あるものはいつか崩れる。「最後に愛は勝つ」などと歌われた愛だが、人生はそれほど単純ではない。千切れたり、壊れたりする愛があるからこそ小説が出来たり、映画が生まれたりする。冬の薔薇の崩れかけた景から、作者もその不安定な愛を発見し、それを「これはさうな愛のかたちに」と表現した。「こわれた愛」でなく「これはさうな愛」で微妙な幼さが表出された。

人事にもあがる総務の鏡割 本多 遊子

総務部総務課、人事課、厚生課などの事務組織を想像してみた。古い時代からの風習で年の暮に餅を搗ぎ正月十一日に鏡開きする。それを仕切るのは大抵は総務課。大きな二つ重ねの硬い鏡餅を取りおろし、錐でかいて細分する。鏡餅は心臓の象徴といわれ、それを配るのは服従を誓わせるためだとか。そう思うと怖い句である。

煤逃げや芝生の光る競馬場 水谷 光子

昔の男どもは「煤逃げ」と称し煤払いを忌避して家を出た。この句では競馬場へ忌避している。現在の競馬場は昔のような薄汚いイメージを払拭し、女性や子どもも楽しく遊べるよう遊び場やバラ園を作ったりして客を呼ぶ。「芝生の光る競馬場」はもはや健康的でさえある。この一家は明るく年を越したことだろう。

初不動柚子師句碑の「未来」の意 持田きよえ

高幡不動尊境内にある恩師の句碑（未来図は直線多し早稲の花 鍵和田柚子）を訪ねての句。この句碑の「未来」の意味を改めて自問する作者である。新道が稲田を貫きどこまでも伸びる。「早稲の花は豊かな稔りを予想させた。私自身の未来図も信じたかった」と若き日の柚子先生。未来は信ずる者の手にある。

ままごとのごとき一生か薺打つ 森尻 禮子

飯事は子ども炊事・食事の真似事。真似だから本当の食事を体験しているわけではない。この句の「ままごと」の如き「一生か」は、現実を知らず未熟なままで生きてきたなあと、自身を省みた果ての感嘆。松飾りが外され正月六日の夜には薺を打つ。正月気分はここで終り、明日からまた普段の暮しが始まる。

一人居の寒さぬぎ捨て街に出づ 八尋 信子

一人暮らしは一家の団欒がなく、とても寒い。その寒さを家に置いて、作者は街へ繰り出したという。それを「寒さぬぎ捨て」として強い表現をし得たのは、これからも一人で生きていくという覚悟を決めたからだろう。その心の強さを羨ましく思う。

臘梅や社のやうな厠辺に 山田 雅子

外厠が神社の社のような作りの屋根になつてゐるのか。かなり立派な厠らしい。その近くに臘梅が太陽に透けて良い香りを放つてゐる。芳香剤のような役割をしていてこの厠辺の臘梅はまことに尊い。

味噌つ歯も洩垂れも見ぬ入園式 横須賀智子

近頃は子どもたちがみんな小綺麗になつてしまつて、昔のような味噌つ歯の子や洩垂れ小僧はどこを見渡しても居ない。清潔で何よりだが、でも何故か作者はふた昔も前の、国民全体が貧しかった時代のその味噌つ歯と洩垂れの様相に憧れる。味噌つ歯、洩垂れでも、瞳だけは光輝いていたからだろう。一抹の寂しさも窺える一句。

バツカスの機嫌うるはし年酒くむ 東 祥子

酒の神が宿り、年頭に酌む酒の麗しいこと。きつと酒

の神様の機嫌が良いせいだと、更に一献。蓬菜飾りには酒の四斗樽が積まれていてこれを神と分かち合う。なにしろ相手はギリシャの神。飲め飲めと酒を勧める。そうですかと、また一杯戴く。厳肅なめでたい一句である。

やはらかな赤子の蹠春を待つ 伊澤やすゑ

お孫さんだろうか、体全体が柔らかく肌は赤みがさし健康そのもの。とりわけ、足の裏は柔らかく、見守る大人たちを喜ばす。もう直ぐ春が来る。赤子には遙かなる未来がある。その新しい命の御裾分けを作者も戴いて、共に春を待つてゐる。仄々と命の輝く一句。

待つ日々や男雛女雛をはや飾り 石垣喜代子

雛を飾るのを今か今かと待つ。京都の冷泉家は旧暦なので三月二十九日か三十日にお雛さん飾り四月三日には小さなお膳でお雛さんにご馳走を上げるそうである。東京は三月三日が雛祭。作者はもう二月から心がはやり雛祭が来るのを今か今かと待つ。男には解からない華やぎがあるのだろう。

生きる世に今も戦や二月来る 市村 啓子

昨年の二月のロシアによるウクライナ軍事進攻。ウクライナの民間人の死者数は八千人を超えた。ロシアが

撤退する気配もない。我々は今、現代史の最先端に立ち、自分たち人類が地球の環境汚染の多くを惹き起こしている現実と直面し、また一方で戦争への脅威を共有する。作者のこの句にはそのような背景がある。三月、八月、九月、十二月に続き、二月も心に刻まれる月となった。

うれしくて泣くときもあり花便り 岩根 甲

「嬉し涙」と表現できただろうに、それを「うれしくて泣くときもあり」と、心の揺れをデリケートに伝える。自分でも解からない自分の心の内が巧く表出されていると思つた。それほどに、桜は人間の心を虜にする。作者の今の境涯から発せられた花便りの句。

泣初の止まらぬ「二十四の瞳」 牛込はる子

壺井栄の『二十四の瞳』は幾たびか映画やドラマになった。殊に高峰秀子主演の映画には本当に涙を誘われ心に沁みだ。この句の「泣初の止まらぬ」はまさにその通り。壺井栄では『海の音』もまた心に残る文章だった。

初旅やシルクスカーフ贅沢に 内海 範子

シルクスカーフのイメージがつかないが、高級な品という感じがする。それを贅沢に巻いての初旅。国内でなく海外への旅だろうと、想像するのも愉しい。

生命の保持がやつとの寒気かな 大下 壽櫻

「生命の保持」という硬い言葉を俳句に用い、切羽詰まった何かを訴えている。命ぎりぎりに生きていることが「保持がやつとの寒気かな」の詠嘆から滲み出ていよう。早く春が来ますようにと願わずにはいられない。私もそうだが、基礎疾患のある人、頑張れ。

鯛焼の魂よこんなに熱いとは 太田 裕子

鯛焼にも魂が存在すると思うのは、その身がずつしりと重いからだろう。そして何よりも作りたては熱いからである。そう、魂は熱くなければいけない。人間の魂も熱く燃え上がらなくてはいけない。元気で美味しそうな一句である。〈鯛焼のあつきを食むもわびしからずや〉という安住敦の句もある。

マスクして帽子の奥に訝る眼 小河原政子

マスクして帽子を被っている。それだけで怪しい人。加えて、帽子を目深に被りその奥にぽつんとこちらを見据えている眼がまた怪しい。これはその人が悪いのではなく、コロナウイルスの感染拡大に伴う不安からきている。「訝る眼」にしたのはコロナ。概して男性に多いよう、女性は全体的に笑みを湛えている。

小さき子は松を引きずる注連貫 金子かほる

注連貫は、小正月のどんど作りや道祖神祭のときに、子どもたちが地域の家を一軒ずつ回り、注連飾りなどを貰ってくる行事。子どもたちにはリーダー格の子がいて手際よく貰ってくる。御礼にとお菓子を頂いたり小銭を頂くこともある。この句では、まだ幼くて松飾りを引きずるように持つてくる子を描く。「引きずる」が秀抜。

ひふみの四^よ気合で生きて芽吹き時 金子 学

この号の校正中の三月、金子学さんが亡くなられた。今号の作品には〈酒漬けの体まろまる寒の人〉〈酒呷り酢茎刻んで朝餉とす〉〈瘋癲の八十路の果てや寒鴉〉の作品も見られる。今思えばかなり病状が進んでいたのだろう。その自虐的な句に対し掲出句は「体は駄目だが気合で生きよう、このままでは終わらせないぞ」という信念も垣間見られる。享年八十。反骨の人だった。合掌。

忘年会思はず喋り涙され 金田 知子

忘年会で同席した方と凶らずも会話した際に、何の弾みか、その方が急に涙を流した。何か悪い事でも言っているに障ったのかと作者は思ったことだろう。会話の流れの中で語られた或る言葉が、相手の心を過去の哀しい出来事へと誘うことはよくある。作者が悪い訳ではない。

冬至柚子一個浮べて得心す 金田 喜子

冬至にたてる柚子の風呂。その柚子一つを今、作者は湯に浮かべて眺めている。柚子は浴槽で作者が動くたびにぶかぶかと健気に揺れる。ただの柚子なのに、それが湯に入るだけで存在感が増し、親近感が湧く。「得心す」とはそういうことかと得心がいった。

鎌倉へちよいと江ノ電旅始 北 好夫

鎌倉辺りは作者の身近な散策の地なのだろう、思い立ったら直ぐにでも行ける。「鎌倉へ」は「いざ鎌倉へ」を踏まえているのだろう。鎌倉から乗ったというのでなく、藤沢から江ノ電で鎌倉を目指す。旅始にはうつつのの小旅行である。「ちよいと」には「ほんのついでに」の意があり、かろやかな旅にはぴつたりな言葉。ついでながら、もし鎌倉に行くのであれば、鎌倉を愛した詩人田村隆一の好著『ぼくの鎌倉散歩』をお勧めする。

菱餅を噛むまなこを膨らませ 久保田勝一

「まなこを膨らませ」は何か不可思議なものを食べているような子どもたちの目つきを言っているのだろう。菱餅を作るにはもちろん餅を搗き、それを赤、白、緑の三種類の押し餅に押し、菱形に切る。赤はお天道さま、白は雪、緑は雪どけ後に生えてくる草を表すという。そ

のめでたい菱餅を雛祭りにお供えする。得体の知れぬ菱餅に目をまん丸くしている子どもの姿が可愛い一句。

独り居の老いの極楽冬至風呂 栗原 季星

温泉に入ると決まって「極楽、極楽」と言う。栗原さんの句では、自宅で立てた風呂。それも一年の終り頃の冬至風呂で、その湯に入り一人極楽を感じている。この一年いろいろのことがあった。それを回顧しつつ手足を伸ばし柚子の香を愛でていている情景が目に浮かぶ。「老いの極楽」に共鳴。

足元を見て歩かねば寅彦忌 小坏あゆみ

漱石の高弟、物理学者にして名随筆家だった寺田寅彦。有名な「天災は忘れた頃にやってくる」は寅彦の言葉で、掲出の句はこれを踏まえている。「足元を見て歩かねば」は今や高齢者にとつて必須の心構えであり、至極納得がゆく。「歩かねば」の柔らかな物言いがまた良い。

紅玉をじゆてーむと煮る餡色に 小泉まり子

フランス語の「ジユテーム」を平仮名書きにしているところが面白い。ジャムにするのだからか林檎の紅玉を餡色になるまで煮ている。林檎に対する愛情がジユテームだし、煮る音もジユテームという感じなのだろう。

てふてふのやうにひらひら春着の子 幸喜美恵子

年始に着る春着。普段は着ないハレのものだから少女は心うきうきしている。それを「てふてふのやうに」とこの句は詠んでいる。「てふてふ」と「ひらひら」を並べた修辭がただただ目に優しく、心地良く楽しい。

永き日やエンドロールを仕舞まで 小林ゆきお

映画のエンドロール。映画館でエンドロールが流れると席を立つ人がいるけれど、やはり最後まで観ていたい。映画製作には何百というスタッフが関わっていることが解かり、一人で原作・主演・監督・編集を担う俳句とは随分違うなとも感じる事が出来る。「永き日」は日が長くなつた春の長閑さ。映画を仕舞まできちつと観て、外へ出るとまだ明るい。いい一日だったようである。

梅一輪汀に鯉の供養塔 小濱けえ子

〈むめ一輪一りんほどのあたたかさ 嵐雪〉。少しずつ春の気配が立ち、梅もほころんできた。池を巡り歩いていたら鯉の供養塔を見つけた。この供養塔は池の汀に建ててあるがそれが本当の供養なのだろう。魚の供養塔は全国に在つて、ふぐ塚や鰹塚なども散見する。命あるものを戴いたことを心に深く刻み供養する。掲出句は一句全体が供養になつていて、格調高い。

京なまりみちのくなまり女正月

小林 玲

女性たちが骨休みする女正月。湯治に出掛ける人や、親しい者同士でひとときの安らぎを共有する人も居る。この句では、作者の回りに座す「京なまり」の人や「みちのくのなまり」の人、いろいろの訛が聞こえてきて賑やかこの上ない。きつと疲れもとれたことでしょう。

猛禽になれず寒禽啼くばかり

斉藤久美子

ご自身のことなのか、猛禽になりたいのに成れないという。寒禽のまま、啼いてばかり。寒禽とは、寒さに悴んだようにしている鳥の総称で寒雀、寒鴉、冬の鳶など冬の鳥をいう。寒苦鳥という傍題もあるから、苦しそうに啼くのかもしいれない。可哀想な作者だ。でも春はもうそこまで来ている。鶯の谷渡りも間近。

句帳まだ筋書のまま三ヶ日

佐藤 和子

正月はなんだか句が残らない。国民が大方同じようなめでたい気持ちでいるので、詠む内容も似、一歩抜きん出た句は出来づらいのだ。この作者も句の筋書、趣向は考えたものの、その表現を精査するに至っていない。こういう時は句を一定の時間寝かせておいて、正月気分が消えた頃に再度見直しをすればいいと思う。冷静になれば何か発見も出来る。俳句は発見と想像力。

木の葉髪この道尽きるところまで

島 昌子

この道とは人生の並木道。道が尽きるまで生き抜くとい内容の句で「木の葉髪」の季語を上五に置き、何やら佻しさが加わった。抜け落ちた髪を木の葉髪と認識するのは高齢になつてから。人生の残り時間を意識するのもこの頃。石ころだらけの道ですが弛まず歩きましょう。

笹鳴や幼ことばの一途にて

清水 悠太

冬鶯の笹鳴。餌を求め里の人家近くに来て、藪辺りからチャツチャツと小さな声で鳴く。この句の「幼ことば」は勿論、笹鳴をそのように捉えた言葉だろう。幼子の発する声、物言いも、笹鳴と同じように声を慣らしている感がある。正調の声を獲るための「一途」さが可愛い。

掛軸の富士に見られる冬座敷

正田 和子

掛軸に描かれている壮大な霊峰富士。冬座敷だから本当に真白な富士。この句はその富士を眺めているというのではなく、逆に、その富士から見られていると感じた。実際の富士山がそこに立っていると感じたところから面白い。富士の偉容を讃える一句である。

熊本の馬刺を囲む三日かな

新海あぐり

正月の料理にそろそろ飽きてきた三日。その晩には予

て送られてきた馬刺しを囲み一家団欒、酒盛りが始まる。その賑やかな様子がよく表出されている。馬刺しは信州や会津に帰省した際にその赤身をよく戴くが、熊本の馬刺しも有名な逸品。四日からまた出勤の家族も居ろう。霜降の馬刺しで三が日を締め、元氣潑潑な親子。

マスクしてゐるをたしかめ外出かな 菅原 淑子

コロナ禍の三年間、沢山のマスクの句に出会った。この句などは、哀しいかな、マスクが日常に定着して様子をよく伝えている。外出する時に家の電気や戸締りを確認するように、自らがマスクをしているかどうかを確かめる。その自分の仕種を極めて素朴に詠んだ佳句。

「拾つて」と落ちしばかりの葉の揺らぐ 杉淵真喜子

落葉を詠む。落ちたときの少しばかりの揺らぎを発見した作者は、その揺らぎを落葉からの発信だと捉えた。あたかも「拾つて」と言っているかのように、その落葉から感じ取った。感受性豊かで心やさしい作者である。

見馴れたる山美しきお元日 鈴木 智子

いつも通り、起きればすぐ其処に見える山。作者は盛岡に住まわれているので岩手山なのだろう。見馴れた山でも元日ともなれば改めて美しいと思う。新年を迎えた

厳肅な気持ちとその美しさを発見した。へふるさとの山に向ひて言ふことなしふるさとの山はありがたきかな。石川啄木のこの歌は盛岡市内の「啄木新婚の家」に掲げられている。

良き音よ氷大根の煮付け噛む 鈴木 藤子

氷大根は作者の住む岩手県奥州市の食物か。青森県の『八戸俳句歳時記』には「寒大根」という保存食が載っているから、ほぼ同じものと思っていだろう。収穫した大根を凍らないよう土中に埋め、一月半ばを過ぎる頃にこれを掘り出して、洗って皮を剥く。縦に切つて釜で茹で、それを戸外に吊るして凍らせ自然乾燥。随時味噌汁の実や魚と煮付ける。これは三百年ほど前からの保存方法という。掲出の句では、その大根を噛むと良い音がしたという。「良き音よ」にささやかな暮しぶりと大根の命を感じた。

産声はラの音ミモザ揺らす音 高橋 章子

ドレミの「ラ」と「ミ」が巧みに一句に挿入されている。「音」も二回、対に用いている。これも巧みだ。「産声がラの音」と判るとは絶対音感の持ち主に違いない。産声がまた「ミモザを揺らす音」というのもユニークでこの産声からミモザへの飛躍、展開が心地よい。

にぎやかに敬虔に越え去年今年 高橋満利子

〈去年今年貫く棒の如きもの 虚子〉。作者も虚子と同じように年を越したが、それを「にぎやかに」といい、また「敬虔に」といつている。敬虔は、うやまいつつしむこと。さまざま祈りごとを胸に秘め年を越したのだろう。この生き方に学びたいと思う。

大仏の懐に入る旅始 高橋美智子

鎌倉の大仏さん。胎内に入ったのを「懐に入る」と詠む。大仏の懐に包まれた温かな至福がこの句を通して感じられる。今年初めての旅だ。幸くあれと、大仏もこの旅の無事を祈られていたことだろう。

梅探る地図になき道たとほり 竹森 美喜

探梅でどの方面へ出掛けたのか、初めての土地なので地図を手にはしているが、どんどん深みにはまり迷ってしまった。まさに「たととほり」である。それ程に梅が好きであるから、行ったり戻ったり逡巡しただろうが最後にはきつとお目当ての梅を観られたに違いない。

寒に入る悪しき戦の矛下ろせ 田中 京

「悪しき戦」は勿論ロシアのウクライナ侵攻を指す。昨年二月から一年が経つがいつこうに戦の矛を取めな

い。一年前は雪を詰んだ戦車が国境を越えて侵入した。年が明けても収まる気配はなく今後も戦争の拡大が懸念される。「寒に入る」に作者の思いが凝縮している。

天上と地上は隣 蟬 氷 寺田 幸子

天上は空よりも無限に遠い所。地上は我々生き物が住むこの世。普通は行けそうもない天上だが、死ぬと昇天するので、そういう意味でこの句の「天上と地上は隣」を読むと、生と死は隣同士にあるのだと理解できる。「蟬氷」は立春以前の冬季に、水の上に薄く張った水が透明な蟬の羽根に似ていることから「蟬氷」と呼ばれる。それを剥がして日にかざすと美しい。生と死の幻想がこの一句を通して感じられた。

夕刊の誘うてきたる時雨かな 長井 敦子

夕時雨をこう詠んだ句は初めて見た。夕刊が配達されると、それが時雨を降らす合図となり夕時雨と相成る。これは実際に作者が体験した事実だと思われる。夕刊が配られたのとほぼ同時に、時雨れてきたのだ。それを夕刊が誘ったからと。面白い句に出合えた。

手力をここぞと婿の鏡割 中嶋きよし

普段は優男で頼りなさそうな婿だが、ここが頑張りど

ころ。義父（作者）の面前で鏡餅と格闘する婿の顔が見えるようだ。奮闘努力の甲斐があったことだろう。私事で恐縮だが、新婚の頃、元旦に会津の義父から「明俊君は今年如何に」と、面と向かって言われたことがあった。何と答えたか忘れてしまったが、その時もそれ以降も、ここぞという場面が未だない。

読初は読めぬ書展の仮名の文字 中村 敬子

新年早々に訪ねた書展の墨書の字が今年初めての読み物だったという。その作品の多くが流麗な仮名の文字でとても読むことが出来ず、意味も解らず。墨書だが、どちらかと言えば絵画に近い書なので仕方がないだろう。字が読めなくても書全体の筆の勢いを見ているだけで心が和む。印象深い書展だったことでしょう。

無人駅スイカタッチへ風花す 中村 東子

切符をいちいち買わなくても、スイカというカードで入場できる。無人駅でも勿論だ。掲出句はそのスイカをタッチすれば認証できる機械を「スイカタッチ」と命名して面白い。それだけでなく、そのスイカタッチに風花が舞ってきたというから、どこの無人駅だろうかと知りたくもなる。風花がその機械にタッチするのは現代ならではの景色である。いい所をご覧になった。

断捨離やつひにアイゼン仲間入り 中村 幹子

衣類に始まり、食器、書籍、趣味の物を断捨離してきしたが、最早使うこともなくなつたアイゼンまで断捨離することになった。登山用具であるアイゼンは作者の若い頃からの想い出の品。手放すのに躊躇いもあった筈だが断行。淡々と「仲間入り」と詠む。

沈丁の蕾たしかむ朝なさな 野沢 慶子

沈丁花は、これも私事だが、カラー版俳句大歳時記で初めて確認した花。好きな花だ。いつ咲くだろうかと毎日眺めていて飽きない。蕾が少しずつ開きその芳香を嗅ぐ時、言うに言われぬ幸せを感じる。作者もまた「朝なさな」と詠み、至福の瞬間を今か今かと待っている。

● 備忘録

ボケるといふのも、便利なものだ。
おなじ映画を新作と同じように、
なんでもたのしめる。

田中小実昌

『ひるは映画館、よるは酒』（ちくま文庫）より